



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80

浮文集卷第三

同編

佃九郎玄清子源の酒注辨

守成玄等の奥書

東堂窓の詔

雜話十二章

病中倦夜

挽詞等狀、をス

青緯堂の記并道行

幸化ふき／たる文

一
七 六 八
五 四
三 二
一

九

流斜を人、く手紙

十

其舟もあ葉を拂ひ引
ま泉の聲も先考体計

士

遠志のこゑ

十二

白抱子が経賛

十三

大圭碑あの文

十四

間脉乃とよふ

十五

頼光綱子令れを漫画の賛
格八百きり経文

十六

桜雪くよゆ

十七

桜雪くよゆ

十八

武陽渭少へをス

十九

竹林院の画乃賛

二十

モセ紙手跡の経文

二十一

報活四章并吉巻

二十二

十七回小説の多句

二十三

喫洞亭小摺ふ譯

二十四

戸田氏三回忌集之席

二十五

妻ふおうれる人の詩へアキル
林外老人へ贈る年號

六八

後東亭

六九

庭人へはうりに

三十

小野天神ま納の波



第一 佃村九郎云湯ふ宿

酒德辞

老んあり雪云成莫^{トボリ}市ふ一季而月を乞ひて。提
を席みそん花も成^{シテ}。心の如く小胡夕とも
古記云
わざたゞ
福のすく
此^シ活世の中乃活か私^シのすく。き物の余光を頂
五部書ニ
佃ワタタ
きよ孫の^シをかくは^シて活^シ。まく^シけ^シて
ち方ハ^シ田乃里の暮秋をメて志^シヒ屋^シ。
起^シと居^シ。寝^シてモ又^シ。醉^シ時ハ川風不吹
き^シ。まほ^シは静^シ。孟^シ以^シ。さう^シきめく^シ。
褐^シタアハ^シを脱^シ。足^シを^シよ^シて石^シ。

おうよは行く。かくれんおあても茶碗を出ス。
ちのへ紙をうとよもこひ放くからを放き。三
盃と又六をやみほく淫ひしげく笑きて。神
風乃いさむとく。曲くねんう。ゑすれども佛の教
も。心裏おのほう伸ゆやむ。誠不切うき老
乃旅ひ

かとうよ
ほのいて
らをやるふ

雪窓うる人のよのま実老人のうへえ。劉
伯倫^{ヤロク}拂を左左の味方と取て竹砢を又左毛。
一刀ぬけ白刃^{ハタケ}とあふ志くねそなた

守ニ 守武吉宗之奥書

六波院密^{むつ}のむとうよもひき業とふ算^{さん}あ。常に古
人乃手の癖^{くせ}をえへ世子理^り古人の參^{さん}とあ
りて半。間不發^はと入^る。ノハ先^{さき}御^ご候^う。ちと本の小
式紙^しより手^て書^かへまをあくまと宝^{たから}とみてある。
予是紙^しをもとと書^か一列^{れつ}とと第^{だい}ふ時^{とき}
今角食^{くわくしょく}乃文庫^{ぶんこ}ふとく。原本のう^う御^ご傳^{つた}の事^{こと}。
ちうきうき。武士乃心もわくと應^うき一物^{ひともの}をうと
まは庵^{まはん}詔^{しめ}く

守ニ 春棠へ遣^しス窓^{まど}の詔

高卧高閣の間也

圓明院

高仰北窓下。自謂羲皇上人と。清風の來る所

飛簾孔

空名ナリ

屋上

瓦屋

怒於土裏之

鳳賦

嘯きうそひく草拂拂々を行ひ。後人陶窓
と併てうやみうやび。讀まざるものなし至り。

口

風賦

屋根之上よむ晨氣をユヒ別をきり。天地怒する時も吹

屋根窓ハ

屋根瓦

掌故のゆうかを。地固不^シく吹く。此の風が名

れ

風

とさんと歌ふよのをあそべ。涼一か。忽ぶ蓋の

日乃新を立一足哉又一て友日子遊ふを喜ぶ。室之屋

卯窓

と併て

日く故人を候まし称く

宿明丸
新号ク

と

のを

涼一

さの宿貴をあそぶね乃舟

音ア

舟

四 雜話

一蒼頡子文を教へる能今能事こと二字もよ
じ事こと字ことを別もの邪广ひろて能のんへ。手跡も
先祖おとこの能事ことを追およせ殊ことれ文字じぶんを能のりて能のん
日子ひのすすらすれ漢かんれと字ことの自己じを感か一筆い之を能の能のん
て能のん日子ひの室むろへくせり者ひとハ肩かたを聳そりて能のんと能のん。能のん
とも風雅ふうがのれそひ深ふかう如ご人の手て語ごを額あたまにももけ

ふもつたなきもの也。自憚といひ御へてすまへく沿
まし。因以謝聲、劄画をすへなまへては補ひその顔裏
好もよかと拙なまうとは、すとてすとてすとてすとて
停んすま付危すま因あめ牛かで筆道出しその用の
事と多ふ事と非也。すく渙先生と能書の名有る人
ちりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
せえま一行の傍紙もなんぞのうへ一字もと新しく書きを
もえまの道程も一ノノノノノノノノノノノノノノ
詠聲閣毛をんで甚怪よへて大笑あり。長夜
股深へく扇飯ありややく写。僕ら有り。ほゝ葉有りと

アホ有ト云ひワヒテ九年母ニツカヒトチ狀不諳
不レモおもひりと又大笑

一東坡う絵の工まも家達う画一も晴小あひとくと
一光緒生涯の心も記す甲斐國山延山山廊下れ折口の
額下てあとひあくねく通弋ノ二字ある

一友みゆの筆とさざらを磨大はすてありま
九年面壁してこそ志名僧利僊おとす首をくぶ像成
る一色も墨索大悟の如九年の万壁ふむじて尻を腐
ら一悟アムラをもて不無用をもてすすす九念面壁於
既んと念一念而悟れ活禪一二と令て二念ふりか

と葉華の恵情をう教乃要主也一様を拿へて而よハ
壁ふても窓ふても岩ふても柏樹下もあもしゆれも甚
時の心の的をなされニ社の的を以て教年嘗てう範
を放されう又昔ノ事の像として其の意より多く達
廣圓痛きあゝ柳家焉無孤舟の一名也川上の観念
津小見性成仁矣園の虛名なるん澤庵も其家を
瀆す。る處那信とは考へれど書をよく識りむる
古賢南紀ノ人也海印光
古賢禪所海印光も達子を責めうありき事へ
一肩義士力もまの物くら扇にて骨を方り掛かみて
秘龜さと元修ふあつて身を絶て開めむと絶命

おうじよあくようりこくよううれせすうき卦よみに
日くかくもかくへた事く切うりいと感へうけうう
一英一株うまくうら縁小水の流ううりよ大笠をよみうら
それ跡^{ウタキ}あらふの経不贊とも云人ありす云きハめて柳
一や半深りんとつて根ふきうつううえきを道のふ
清水流うの西行の経すう時ふち草あらと下脚玉芦
地と云ふ今も柳あり古跡とも。行御の時元修うう
地小生と年若の心ひうきあらと東北半らと土佐家
へ詔をハされうきも。首松戸の経う檜扇をかさううる官
女とキモトあくも答あくううと見て此事アよも

お子めのこあらふ土佐家の若へもたうはまくさく仍て贊の
事ことひりてとくとく 通つうのくはは水流すいりゆ柳陰りゆいん志しと
を立たつとゆづき 独行潭底影どぎやうたんていえい數息樹邊身
賈鳴くわう自愧じくわいの向むかへと通つうのりと奇きと形かたちす
あり

一つの山さんも芦よし野の處ところへあらうと女のえ仕えむふはひひて
こじる勢せい冲うつ勅てきて故ゆゑへゆくに脚あし能のともと興おきあらまで。そ
の方名なまなをよすとつまむきくとれにあらうれと女めと
ゆくをあらうとてそのあらふ脚あし能のくすひをきて三年
を立たつとまうとまとア上うわくらゆくと心こころ有あるうちの女めたう

一卷いつせんをねよとく人ひとが墨すみハ二つ墨すみさせて歩あるきいわやうふ
御ごを画かしても三百番さんびゃくばんの外ほかに二つ墨すみでも六千墨さん
正先まさ互先ひさをねつづくと方量ほうりょうが写うつりくも不ふ徳とくば半はんと
とをかくととく人ひとあら又また暴ぬる石いし云いふぬるぬる草くさとせう下したの草くさ
一株いつく吹ふき小こ手てあ度たどと泥なづと称いふのとくふアと
る人ひとあら當時とき墨すみ不ふあるてハ仙せんト也よ是よす対たいすると
宗通むねとおの泥なづ也よ名なを是よすととアされくく仙せんトふ
皮かわさよても不ふ脱だつ又またれれても後あともくくと其境そのきの遠とお
ひるひるくくへあらう風ふう雅まさの上うも黑白しらくろもあらふもる
ものすすもあらら墨すみとと人の上うもと持もてと甚ごん極きわも

日莫時うらやまとなつてて下す二三とひうら
風雅の務方まくちたよぢるあ小河ノ一里人を
壓千人を感ぢりてもりうれきにて下すも一旅者
旅をうる上すかと遠ハモせたりひくて月雪の松林
をくわみつゝも是をもとより上すハ必裏
口金をうらしむそア近ヘモ通旅館へてはく
時を牧業う書したゞく間ふ聲や客を白をうち
黒を透すと早し人をうるあく傍ての旅
のやうと小あと神意ナツヒ思神を感ぢる病
魔を退キ兩を初ミ名を从闇を通リ惡善をれ

小生身神意ナツヒ思テ一旅の有難云ハ心を配
私ニ形ナ小配きとひ神ノ其態のつまアノアノ風雅
ハ氣のからむ不空心有之意をひすひてり氣と心
たゞひづく猪財を佳句とたり心と氣相和ス時也
乃向と歎りの心と氣のすけとる時也アト向と歎
セサユテ多小あを下すとおも上すトモア
そひねカヘー是よも上すトモア
一昔仙庵の大ち上法も付さうのあ
いつてのふつやみーのまくーのあ
ざんびくいふう楠とぢの老

25-1-1 與毛古志庵あつ勝

一重鼓ふ子日 桃花あやめ ゼヌ 四主

四主の重てみとむ侍るとお花をまねとお玉
鼓を月見かを仰せし御能を粉り脣の三支ふ
巖流弁才正くを枕上ア立をうひ重てみ玉
一重ア重の裡よりひあるとえてあハぬアタマ感レ
くと一重ともおまけ翌日甚玉鼓をうちれと甚御
楼姫すうわうひ何と云玉鼓う思はづと仰上意
ふてあつて仰せおまえ小弁ひよをわらうとなア上
きく花をとくやうに案内への上役ふ名くまづる

とおおき重てみの重メハハハと二つまくらと重
花主ねを當て小ア上侍るよー乞ふよーて幸
え家小巖流弁才甚尊と今とも不絶已給急
らとととと一名お紫雲吹きよー月えも奇石
ふ心をよちうもの之礼義を必風雅か心ちくて多
くよき事せばや強の文假つゝすしてお舞
おうふもあらじやうじも形ぢ心つうひかうんれ
ば通じうさる事すあうじも昔一老人の夜詠有
一事序書寂子曰朽木不可雕也不器うちを度
きれとととさかと不可と亦一とよふらいう

ウカ
おうさまの息あきてつぶ席よ否食せとく日中の
道程すゑりれりふみ半トシシマナヒトマ
後も源氏のてふをはを終、天邊へとゆつゝ
おへ一室す書いねうりくとりの半トシふよ
うけとまよの不様時ちりまくあまく色未搞
花の文様平文うやの半をキリてれりとま
れあきとモーとハとくひうさるしりくを何道
もくとてよじせれの字心をとむへとふくふ
の事をせめて遠き國中をみ教るもいの
半なうえ又ひとのふをんぐするう

源氏と金瓶梅のとーとハ亦す源氏の道程す
ぬあくさくやをま神も衣とそんあうぢ
つこのそれとなれを次テまた源氏とく
かくふてお供の大切なる半ハ所カく押て是
日半仕事とゆく御うゆとあく又韓退之云宰
子書^{エタケリヒロニ}奢侈と憎むの語がん書且書也混
難えず

第三 病中倦夜

やうにかふ老婦は寝て病りおゆきもおふ
し。おうともやも倒きて今ある事乃ぞよ

せの中よそうくみけうぢや。志うハ何きよと夏裡可
一首をほこり

後乃世とかはまにとくも一くみ

あらぬ旅ふー小舟の中山

漏れぬ流形漏。障あう絶又聽。東窓未生白。枕上
一灯青。右雲溪先生病中佳句。今思ひ

歩石

良薬即ち病魔を追ね少時

すく生く何をよし風上せす

疎絶窓志ろく射空一

オ六 挽詞羊秋、をス

又存在乃時ハ立トモアサハシテノ第をつたり
之をあざる成考とをあり。考ニシテカフ歴はるキ、
洋を地ニシテムニ天をあく。此考ニシテ事ニシテ
セ。などてよのづか候有ハ常レヒテ。然と御りて
ハ信の傳。うち得るのは一あさり。然る不達キと當
らう候内にて。其信小野、されハ又於其居ちん
や。さき立トモアサハシテノヘ友おともにとく候
信を歸ミテ。之は。只ノ乃事。アラ成考。アラ深
く考人を知。はくに事を識。考必信あると

説

欽哉

文集三

欽定四庫全書
卷之三

十七 霽微堂

予極霄徐亨者鶴山別業也七年有之於此
托^{ヒテ}厚^{ヒテ}望^{ヒテ}置^ク後^ク花^ク

堂上之名家詩大家及大禪師律師文書
著術有此急需よ麻レテ一文を手ヲキス

道長墟綠屋
高閣雲漢高
林霄綠堂
立亭之高塔

筆立不全。筆立不全。筆立不全。筆立不全。筆立不全。
ぬる柏、成さる産の古の衣服もあらうやうめ。

1

陸務観はくよ。下ハ機をめぐらす。詠うかれてくどく。假ノ毛あゝ丸
歌吹海

根よ。くとひ淀川みさめ乃。水の面れゆひうきも清もあく

行菜アガ
詩シ
見說ミツテ
極ハシマ
費之ヒツジ

石凝姥日本紀
石凝姥為治工乃焉々細々也之解の而有源也其也之多也

六言

盆山の記出たり
土藉為石、石氣ノ核ニ
アリ。土藉過不潔トモアリ。四時おのには、
様子

物理論

文集三

卷三

薜荔岸下
立てば常すおさまる。よし。香叶ハ列。薜荔薇薜葛
一客醉時
榛栗一
江賦
木々の谷
志一き
足りせぬ
いかたつしとく。このわ七年よ清く。翁のあふ雨
まつの谷川す水よそそく。まよわふの庵をか
ゑう代の
ふくかきく界す。すまかうき園。ねが碎石舖、岩が碎石舗

常盤
とく代の母。うへとも若熱を持つてゐる。松風を
ときこみ不^ハえり。ひ女の神^{すめ}ひう、たうん 医房
ねいを解^ハく。大食^{おほく}國貢^{くに}松風石^{いは}
角微^{かくび}を奪^ハふ。角微^{かくび}を奪^ハふ。元^ハよふ風^{ふう}を云^ハふ。
孤向^{こむき}を破^ハる。平^ハ口^{くち}くく。孤向^{こむき}を破^ハる。も絃^{ことぶ}を挫^ハき。莫大^{ばくだい}
其鏡^{かがみ}を挫^ハき。も絃^{ことぶ}を解^ハき。も絃^{ことぶ}を解^ハき。も絃^{ことぶ}を解^ハき。
走^ハ出^ハト。一旦^{アシタ}暫^{ヒテ}石^{いし}の被^ハ、肆^ハ石^{いし}にて敷^ハく。母。广塔^{ヒロタツ}文字あり^ハ

アレタシラケ
且皆 詩 ハ磨滅の口はひあ。き人よ代えても料はさ
石の鼓ハ
石鼓歌 四季よ必絶をあぐへん。あらせん。山歌乃
モ料はさくと
云うく時舞
而ひえ都をもまね、流くはれや小杜宇の歌をあか。にの確ニ先
富情

乃敏の毛よれあす乃寫き入る日や。ふくとく。
る糸本れおひそみ。雪の糸。毛乃あく。衣。時ももの雨乃
衣柳ふうけぬ。てはさらんと。碎ける。ひる。拱ミス
花の街柳陌。第ておもへはうれざ。其志に有ふむちくも。の街柳陌
の咲青シキ樹。のあくく。日乃幸れ。之味綠ミヅク翠。
絶ちくあり。はすあきそくふ。後園。もつくの草
ふく。かん。蜜口。我待へて書。と。なす。と。あん
也。

昔年物不傳。山と云妓ち。方人所を縮め未
唐を窺ふ。といへば黄雀用盡せども心残る
めを酒家の一ま平生涯の所は志かひ傳く。
或時支那元佛から送きて至電をう。かと發も被も甚
よ優遊み別れみちのくね方をあんと故よ身をさう経て御
秋風もたや吹きまくらむ乃來り

あれぞ言葉を走る川の岸

とあみてをわざと切拂ひ山林ぬか入るる。
恩乃里人有かくれたとひとよておまふね

恩ハ降下

クレハ

あく跡るそーあられ、山里不
そみそめ衣裳付ゆれ

又

あく跡るそーあられ、山里不

そみそめ衣裳付ゆれ

きらうそー
形迹ハタケ 景迹ハタケ
ひくいのやうゆやも
ほく花ハクバのまがえ
蜂媒ハチメイ 劉後特
蜜口ハチミツ傳ハシマツ末母信通
薔薇ハチビロ説品坂東ハセドウ
吉良ヨシヨリ頭カミ利市リシ紅
凝是ハナシ纏頭ハナシカミ利市リシ紅

樹中の一僧

西林寺惠持禪師

木室三百歲

庐山志記

樹中的一僧。這是ものゝよ評品。——東風子據く
さうなりこはる。さきもこは劉後持禪。持禪の事
かとしきれ。東安縣の樹中の一僧。三百歳後
禪をまて生滅を被る。又云。一語不言笑。ハニ
みハ年老乃移くさむ。宵拂。晝花乃遣
物將相不動く寫矣。ふく經歌よ歎。永
喜でこれを喜ス
於是乎書ス

時相手至て
仕官而將相而
歸故脚右起詰

叔り年老動くせ辞をかくとも。いふく。今日ハ
郡山老人の寢とあはよハ。四面風色及ぼく

承叔盈錦堂記

ま対庵清く表て於是乎書

オハ 幸化平キス

語をあきら。されば。方哉用あきら。小おもひ
かして。おアハレ。——ゆふ。駕子たぐくも
み佗。ぬれだけのよとあく日教をつまれ。游説三
昧やく。窓乃雨よ千里の旅をんよ。旅御。禪
よあよとおわあくら。刻古キ名。——。八橋志
朽く。うちは。ふねを。——。かく。——。ふひめ。至れを
道の泣。心が者。——。お家通位。——。其身。——
筋をくへ。別文臺。ふむ。とく。かくても。主を乃

済の底とく。一橋乃清風を吹く。——。これ甚

十九 流觴主人手紙

牡丹ふ獅子一体、新をも有非皆汗溼風を浴す
モ。附不辞も半もうなづかうありと鈎唇委々ゆく
歸ると承る。洋兄別出立是お候後接席と仰書親に
とそくの文書拿り面白是又社午陽アシ院
先生へよ／＼下アドリハ

廿日

廿十 甚、舟より馬糞を拂ひ、是に
之御京の男をそくそくわすく繪畫ハ同不
あくろ拂ひのむとげこまの不

書先のあくは耳——腐りぬ
れちゆや、恐到て否せん以當處て、所を知
らき世人熟風とぞるも、悉く石松を以て。
今厚志深うそと歎美やとがくて、物にしてア
附

第十一 丹寒泉へ旅、藝ハ先考休斗清淨余

年々越也

ウツク常み側、うて岸陽ふ有一時、ま町を
き役事りぬ。古木床へく披き、とどく向あ
杜宇も未うち体むとぞ

句中謂す

轍土綴のくと歌む。汎足うぢふまハ船よまうに
源氏宗
汎足同シ
知章騎馬
似象船
飲中八仙歌
三瓦兩舍
妓ノ集ル施
舍ノ水滸傳

誦

轍土綴のくと歌む。汎足うぢふまハ船よまうに
轍土綴
後於に嘗紙
名ヲ達セ高
也
ちくへうの紹う蛭ねもどりともふなうと。仰うる
めあれたるす。ほくまくのうそ不ハ無ゆうなり。
詠よ疋てちむまを抱き。弓は矢下からぬ御階の

誦

達人。今筆をひくに既にや時已ふまく水滸さん
ミチヤ
よの道を畫一て又折ふ先人ぬらずとくよ
 一筋。日日の首をくふよ五つてかうと呑。声を放
 て。どちらめびるさうひとをゆければ來えのむよを

泉

首領らん画も因一むめのむね

識ふれはめきくる一筋ハ袖小品くくくぬ下脚。筆
 と匂ひて手経糸花ちかこぢりくよ。いみへ今この
吉子ねね
吉子ねね
吉子自畫譜
吉子奇
 あくまでも手をうちらきてハセの上。人の眞跡もこの
 れならう。もくじの跡跡とふるかくねむ

故集

よ。ぬ。ぬ。あらひむむけ。至つて孝有のまゝも
耳たるやその辯。そろもせ。やく。ゆうさ。朝夕の心
心裡吹毛
書吹毛。常と磨スの一樣。もくほく。達ふ選。ああが
禪語

ちよ。柔よ。おひて。其日も。表のれうとうたう。なま
泉の風流。雪ハ。豊よ。白花れ。おうを。游。へて。孤岡
破。と。都を。左。よ。だ。四。を。な。く。春秋を。厚の
考。く。ふとも。あひ。おひ。日を。算。へ。旨。酒を。置。く。ら
賓客。ふ。令。レ。ち。ふ。賓。翁。を。つ。し。て。枕。ふ。る。ま
輝光。一
金精。と。云。と
今。泉。津。ノ
経。り。て
耀。厥。福。と。く。す。る。す。る。す。る。す。る。す。る。す。る。

いはき。ゆよ。く。さ。ま。極。く。ゆ。と。す。の。底。く。迷。く

オ。主。白。指。子。之。画。襯。

源のさねうは。うへゆ。あ。みん。と。て。は。う。う。う。は。弓。山
崎。中。て。金。と。ん。む。ふ。け。よ。も。あ。は。と。よ。み。待。て。さ
ー。う。お。て。あ。ら。ハ。は。を。ふ。く。ー

形。く。身。清。ー。旅。ま。か。ら。お。を。乃。む

ト。ノ。句。ハ

な。に。ら。あ。う。れ。の。う。ふ。ー。う。し。ん。あ。う。れ。す

寺。主。大。主。碑。前。え。文。

石を切。不。伐。運。ひ。坊。胡。圭。子。う。志。ふ。ー。セ。影。す

築きをきく。化善乃へとなむ織子羞曉城
そくひてくに乃志ふう。よくかとた支豆とをえ
ぬ仕くたり。やまと風すくわ老先やまくと棲あふ
む久の風むおとろきぬる。併とおく神ぬき狂

事

おとひあけあきなをかのむかハ

右葉自三日妙導招提入速く

才十四間脉カミホト葉

宿藏主

誰謂葦ス角あ一角ツクニは牡丹花老人必塗ら
ん。角小牙スガ一牙ツカを森シロ抜ん。遙アリ

斐端
詩經

白羽ノ白
蓋子

洞玄先生。翁よ庵タケよ庵タケを六つねむ。嘆タマをひく
ひ月ふうも梅を翁タケ。も白きるタケ白翁タケの白人。甲よま
らくタケきるタケのタケは。性タケあくに白翁タケのタケあくは。
翁屋タケ乃翁タケあり。翁老人タケ。さやけみを翁タケあく
す時庵タケのタケは。甲よ金粉タケを塗タケ。掌中タケふ愛タケ。是
ハ乍四明タケ。狂タケ。金龜タケを衣酒タケ。平換タケ。是
四比字タケを名後タケ。翁タケ。翁タケ。人タケ。翁タケ。翁タケ。翁タケ
翁タケ。翁タケ。

ゆうよう底タケ乃翁タケ不タケもじ龜タケ
いくや波タケかさのまくタケ

文集

卷六

と古んとよみく。主婦くそおゆく稻音へく
神ちう人和へて年給長く。かくはん遊ひ床
をや百七余石をんく。

此後賣千鯱
ヨリ度りて
今物別約
玉あ
半十五枚先綱ふむろひ金れをりす絹の賣
綱立て縫ううハさの氣あうる
もさう清

浮きあたると第ふ山うう

歌えあく咲

半六枚八トキ一作

通人某元章は筆架哉游る。李自立筆生花
自是才思日進と詮ス。某是才思即く筆の如く
の小字ノ如也。画以名ある。當時庵字肩龍也。一
一枝云々取法者多もぬ事無いとあり。程より其
の優殊を燒金火瓶四つ。又ふ絵も書きぬ林成
はれハ秋も文り。差し色を夏見ハ宋人富のぞ
て世故多ぞ。其の本風かくひ急りて取車を
ひよへ。殊より極ハ昂ハ奇云矣。若者く

歌シテ多よ麻もあらん箇の中

五箇の歌を寫乃をちとあて。あふたあひくハ

と掌故ありて。既して能國ハよみう。同平キモ
ひく朝夕此すよ。すより有る。

は飯師ノ坊破立者人、あアあれ

十七 梅雪へ西事

山樊是房
梅是兄
黄魯直

法修ノ土つま葱娘りにてねど肥を彷彿き鈴の
鶴も又山樊も渠う才あへ一三谷もあひと傳

ヘタリ

本城の脱と迎てゆる御ぬうかも
若く不用心とアカアカする城の字れと猶笑は治

アホト

十八 武陽渭北遣ス

東アリ幸何りとハ時ノ嘉福ヘ。レ度万句詠
子故あくみちテテトすか。東福も塔以乃門ふ
方ミ一字あア。乞をおもひすて無ツテ誓
一とカクア面乃差机

修

長く通天橋と云津舟をりとまへ一穴賀ミ
才十九阿みの詔贊

山僧却の堂宇のひりて。そやれはあアとて
先君乃あきらかにゆふうちふも只小娘の事を
あされとすれも誰不以てあせ哉

物ひとはあくねうかみうるす叶ふ

方北色葉多詠く詠文

在翁雪元の句も粉骨又章も中。人生涯莊園う
上ふあくん。真畫て不盡く。大道意ひどき哉朱英。も文
其句尤真跡。世遺の重宝。また庵也人とかていふ
らを共不以せさん也。年三十逾也

え文口手と自下旬下てと有り

方北雜詠

桃徑口
後庭花・
尾ノ子之
一にあの桃徑口。近年後庭花が盛。不脩をともじ。俗
を破る事目不痛く心よねがくに拘たゞ。中寓る所と云

男をホツ象燭暫時を金千足の價を以春宵を壓たゞ。せ
人書哉。其價とて足供考を待る半端す。大明律
云ひ眞莖ホレイミ放入人ス糞門者ハ杖一百

死刑ノ放ノ字犴要アリとて放とはす御ゆく
云奉可。理業をすれハ杖一百との義志れど、
お尉なれと杖小不及を惜むへ。放の字と下
云奉暫時千足と其間小投者必杖一千。道
喜を班道とへてかうむへあり

一平生年高あり名ラ崎と云。死ふおとんてつふ事ある乞
迄の情思詔へまし。死て後必一家の考とす事とす

おアキラセドリ。たのみまもとよ半の口だみる
とゆくがれこまをね。不のぬなうといひ咲て別死
ソシモトキサヨク小済行キ去佛方へお詫笑後のおす
ア上り生え極て一家子は死あんよの上理のせれむた
ん。とやうく佛を流らまづふん。口古とけて一氣和て
むつやうううう。その後又笑候ア竹アリて早シぬな
らもエリあけもさま。やあうう。不のぬまえある
時ち放キ切字。人の死。其の言也若シ。东坡う焉、張建
暉が暉、是ニハ劣る。

一チ所西谷ふ入て然坂長範墓社の宝を奪ふの夜。殺

燕
暉
名妻ノ名

多の盜械をあつてきて。長範いうおもひそん極下
岩上ふ休みて。山の雪の光を感し。すすんで入て
黄金を抱き。すうて四面を拜ス。鑓カツ比ハ墓石誓ひ云
城徒山ふ入。後後く佛供養カナすとあやうすれ
と後繼を傍りて空函二枚うち。生お死後のれをひ出
唯今乃くをかばふ。ひせて今

たうのふすみはるちはくくこのとく。後
強盗長範とすくらむ。まとも語るまつても知れ
うて。て海ひ國をうくる

吉昌
ウレホメ

一元之三月三月三十日とせうそへ延宝二年みせ続
き日とゑみ月と延ふをち丈の丈のうへもくなく
よふ。まじめとて世の人れ衣もうつり御の花、和音
さつき、構ありひうさん 桜いろき、源あくらゆ
をなじむ。往て再びやすか。壁の花あくく
夏の家ともどもの向と。秋めをかなま車老
ても下へおうほ水ち平橋先へて波路不麻を敲て
ニミ友実葉源流後編のれう。其向の花あくといひ出
助役を絶ふとやく小説源く決し。源はせめつね
詞家かく教きくもとを慈へた牛と。氣を端ひん

を屈一て來る不於來めう。折角お前幸あれと
も又心のうへぬばんねどうの様あくうじを暫くお
旅。奇、嘆あふ心の船を泛へ、又ふとくれ道もあくうと
放蕩の日をえうね數すかもあくと。既おまえ莫合
車て別折肩不ゆ。舟中えよつとまよふかくし
とちあすててうへを乗一乗やせの船をねうと
正く言ふと。お長者をれり、暫汗をくら黒
一透吹下ス四舟の風も匂ひだに半小玉を一夜くく
や唱へ歌て船底不入て源か轟とく。於是春を價
修う自負よりハと云ひハ。おりらき源こく

事一宿詠よひのうまれる神必苦を痛ハのう
す古今長例まゝ。當时豪傑向不憚ひ人。自他稱
あり。お詫び而已。即ちへき絃なれど奥とももあれば
遠うへゆかむじよとてゑーきふ

老もいぢり源彦さんとすうじき

廿二十七回忌は語る多句

秀清のゆき先考十七回お遠忌を移動て松吟
のうお詠は月夜をゆく。以御酒一石と候
生氣も口やもくわく併様の右方

廿三勵學子歌

一朝雪路果たして下るハ松床危古て紛
ううう。ゆき不立ちあくもく節を章て神の
仰の山流傳の林をさんすりか
壁^{ガムケレ}て云道を窓て書を書へ。せよ箇公とよら四を
蒙て用る事あう続。勺中かう千縦あんぞ
ハまことの良之志ハあれと

トトト書を不く承花此格何ら

肯享保廿一年夏月仲院

湖思文

茅齋喰洞亭み遊ふとぞ

え又ニ年十一月十日余イ。ち岡氏後苑の楓葉まい
やく緑の肩を捨ひ。人すすすとひゆうべ
あうて群侍まは。日ぬ森池波を洗ひそこは
うやうやしく移り流きまくらみうち葉。石うと川。や
中院内房二下署
初の切の
北小路おどり
庄子秋水篇
莫樂
濠梁今
かくらひあみも遙くをか。奥うかと奥うむ一む。濠梁今
あくちあく小道を走り。御剣も今更
かくらひ思ひおどりはぬやきう。歌うて歌うておどりを
る雨のゆ。風不輕く。二二、夜斗る。かくあうて反照
おまくく走り。ようウノ経像。おき抱持子キム
みゆのうひんあまく。よもんをもんや。卅時一般清音

ソ常樂
ソ池上高閣よりさへなぞう遊ひもあ。又の
常の一へちく。平湖汎ひて庭の花ハ十載ふた
ふ。うちうじは。やまとひ。背。東あひて脅兼手て
笛取ひ。かくあくハ。蕭を吹き志こて葉。

楚山ハ
柳林院
虫鳴の聲をひ。南ハ和光梵宇。妙鐘声時々撞ひ
合ふ。かくえひ。深み六時堂のそへと空を通

ひづる。西ゆよ遠てきをし。林くあり。一た住むこと
うそく上久カミサセ。一そなむ。雪の寒天。うり。うそく。くま

上署本多貞吉
ちの署清半記

か井乃タシ。うそくふはも
かみとやがおかへて朝乃はあうめ

彦葉ふ葉樹乃ふ世界ナリ

才七五 紀州戸田何某三回之一集

文幸古太乃ま秋花候。交わり。もせの翁。人のゐ。月の
雪のさらひ。ふうきて。傍るの翁。有八日月の三秋。山の
花。あらす。不。名。隠して。指示。功人。あらす。は。翠。の。の。

發題メモ
指シテス
功人コウジン
蒲相國カモサケイ
世家セイカ

きくあらす。の

ツツニア

一二 あらす。秋の。在。草。乃。花。

面上三年土
生の叶又生

老杜

きくあらす。の

才七六 ま。不。れ。く。き。く。ふ。の。き。く。ふ。き。

い。め。秋。の。け。め。我。笑。幕。考。乃。す。み。り。く。ハ。一
く。又。恵。あ。く。い。そ。く。と。い。ひ。と。て。ひ。つ。く。ふ。ど。
の。事。を。ひ。ま。ふ。九。月。十。三。日。と。り。よ。平。と。え。ほ。う。を。る。
お。通。る。跡。の。ま。く。旅。さ。ま。く。方。へ。ば。と。く。ア。乃
度。で。ほ。ん。と。か。く。て。ま。よ。手。行。お。中。す。も。ま。か。
あり。す。た。る。む。の。ま。く。ふ。な。と。か。ほ。う。て。ゆ。き。く。し。

や。かよひし包て。絶意のまゝをもといまろくお一言
二言。傳よ者か教古き文ふもけふへまゆをいひ無
せハ。佛の心も法もさむとせに一處あつた事
を折。易を成達する人多ひ草むいよと。老の墨
あるひ立ツ日も因教をまづ。たゞよきむつきは
旅ナシト
春陽ナキテ
ナカニナリ
不意

あ。自教を極めて。旅ナシト。ゆきハもあく然る方の
宿ゆ。まく。すくべき翁の人あみなし。旅と。せうふ
おとじひ乃年がみつゝむちひく。目ととぢ経え
御ふ身を極めて。盡る事か。すなむ。まく。蟬乃
相の。うち。驚き濃たりとおとじ教れて。まく

ふとよき。ちとば力みと。押流に宿す。境界不
法。すく。歸く。あく。も。ト。や。く。時。中。子。房。家
と別。ハ。き。る。家。き。す。ア。ま。と。す。と。旅。て。ち。な。室
く。ん。ハ。春。を。ふ。う。か。ん。あ。む。卯。乃。花。の。洞。を。あ。く。み。で。
初。吉。乃。晴。ハ。宿。そ。ー。き。き。と。も。又。も。寝。を。あ。の。え
ふ。ん。古。お。ー。ハ。う。つ。ー。に。誰。れ。此。境。ふ。あ。く。人。あ
は。ハ。旅。被。計。ふ。ま。む。ん。と。寝。え。お。き。み。ハ。人の。う
き。を。引。ほ。す。れ。ゆ。可。ま。の。書。ハ。か。く。空。あ。む
と。香。爐。庵。と。あ。く。セ。き。よ。先。よ。ま。ざ。く。て。熟。た
侍。る。ア。山。神。を。と。今。ふ。り。い。ん。と。ち。み。と。は。は。

アーチのん。ぬことぬく。かむうけり。まわら。
きふとをそよぐにて。およづく。かむよあくへ。かく
ゆき。ゆかねと。ゆく。かみゆもひそく。あひもそくで
ぬ。あらす。孤灯ふきて。活の立派も。自尊く。指節で
ぼく告來。きる。みを。後。う。う。て。ほとな
く。あく。事。ゆく。情。そく。みは。まし。と。が
め。面。同。まし。

あ平克ておとひく。まは。花。松。柏。

吉をえひ
人をせひ
浩をまひ
終をねひ
一橋をまひ
かくまひ
愁を療。し。平。運。ゆく。我。一家の。憂。を。傾。く
風。を。起。す。ま。す。く。ふ。夏。ま。充。ハ。地。の。ハ。夜。日。

八生キ。月死ス。あんそんかうくち。

あたせ林外老人へ贈る

柔字。由。林外老人。お。よ。余。遊。て。至。精。至。好。人。
は。朱。庐。を。放。く。先。往。此。年。六。十。之。賀。ゆ。も。加。久。を。賀。ゆ
不。則。往。六。十六。

龜乃も哉。引。も。龜井。の。水。お。ま。

あたせ。後。東。亭。

泉境只清別業之
濱亭也

後。京。極。秋。風。も。入。の。室。も。か。ひ。の。れ。と。お。ゆ。は。西。平
う。だ。む。ち。く。う。う。は。京。西。の。浦。と。ほ。く。ま。浦。正。除。む
く。と。波。ひ。ひ。き。あ。う。北。平。舟。の。ね。連。を。あ。む。う

前 駆
信
諸のみくはめさへと當ふ事す。此れ凡まざれ
諾、御靈ハ
伊弉諾ミハ御事里主吉也云。是の胸の塵汚を祓ひせ。いうゆもす。道返太神ハ
泉門ふ塞まさうて石をあらび酒と宮たて物と有る傳之。傳れ夷
す太神也
少戸ノ橋ハ高千ハ修ムクヒに取あけほの宮密をそぞと。往ふ撮
櫛原也

説ノ御靈ハ
伊弉諾え而
事黒主吉ラ云
道返太神、
泉門小塞カミツガシま
さとて至アリもあそ酒アソブく宮ミコトノミコトたタマ努タマツクム乃ナニ之シテ、
す太神也
戸カドノ櫛スカツハ高タカ干シタケハ仰アヒてうしに取アヒあけほの宮ミコトノミコトをアリ。信シテお撮スル一
櫛原也
て。ニタマ三声ミツモト肩カミをアリ。はハうちて。共アリ互アリ
心ハいひ落ハシマリひて。手ハ作ハシメと第ハシメ。けハシメ風ハシメと千景チハシメ。暫く破
きとハハシメ急度ハシメ也。らるべ。通返の大神ハシメ。され。心ハ定ハシメ神ハシメ也。於是禹ハシメ也。惟確
島也臨崖ハシメ。立ハシメ阜陸ハシメ。小戸ハシメの櫛スカツ遠ハシメ。小戸ハシメ。是ハシメ法
海ハシメ賦ハシメ。名入ハシメ月ハシメをぬううに愛ハシメ。朝ハシメ日ハシメとおハシメて見ハシメ神ハシメ。江ハシメ。

を嘗てち虚うよのま新感。ぢかよおふ。まは
庵うるアハ智也庵あ。様触毛を振一時小
四時の経を以て嘴て重ね。一て外ス

其の名大半ち復古へ
かく書古事記小あん
歴史久遠と來之楊氏之

方丈九門生徒人句引

天子乃遇八日月乃饗之矣
民皆之張弓

去虛八海

卷之二

C
π

雨縮と云ハ
幽林五記

きうちあるあつて。嘆て云々怒の字を多くあれば字
功あるよ。されど君も社字の句よ。写り字が残りあふ
矣ひ別れ。ぬれ紙かけ山のまゝアトリモエ葉より下へき
ものは石の骨。只又不自暴不自弃の人を惜し。仍て其
句をとおさんと。さあんと述ふかう句ふなつみくとも下もあ

三十小野天神を納く
坂
紀府

一袖之郭之錦城之下之人。固次第去博訛名。跨盤
遠久。信心。可。上郭。可。其。可。其。
乾中。英靈。御神德。嘗。小感。因。以。故。有。之。因。以。故。
「後記。序。子。信。宿。」。安。ニ。之。兩。君。一。句。乞。幸。

卷之二

三と合をすて三吟と奇絶とす。是を放てハ久儀の風頌
音有花鳥別計惠小叶ひ。神慮別六合不彌
らん是が事を退て納めまく。キ一宿と松の様
なり事をアレシム。

右全篇門人艸々庵雪川模寫之

淡々文集卷三終

風
春
時
文
生
子
ウ
文

五

鳥森

五
航
敏

广
文
書

くの御事に之處に大も
而土は花吹雪の如き風
御事よりはこの一月の
事もいふるが、之ゆ
御の毛あつてみづ雨

文貨堂誄譜書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同

後編

嗣出

同

數句集

全

行脚集東東龜

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時庵高判拔書

近刻

寛保二年歲次壬戌十一月望

浪速書肆

梁瀨傳兵衛藏版

心齋橋筋北久太郎町南江入

